阿部直昭さんに聞く

本展開催にともない阿部直昭さんにインタビューをおこないました。「彩壁」シリーズをはじめ「大地」シリーズ、不思議な立体など、幅広い造形を試みる阿部先生の制作の秘密に迫ります。

画家の父の背中を見て ものづくりの基礎を学んだ

――阿部さんが画家になろうと思われたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

阿部直昭（以下、阿部）　一言でいったら父（阿部平臣）の姿を小さい時から見ていたということですね。夜は絵を描いている姿。昼間は中学校の教員として教えている姿。それから夕方になると畑で野菜を作っている姿。当時は中学生の生徒が教師の父の家に、夏休みや冬休みになると遊びに来ていました。

私も教員になって生徒と関わりを持ったわけですけど、あの父の時代というのはまた特別な時代だったろうと思います。生徒が教師の家に行って一緒に過ごすという教師の仕事に魅力を感じていましたし、父が夜に絵を描いている姿を見た時も、毎日同じような絵をずっと描いていて飽きないものかなとか。年に一度、夏に東京の方に行動展に絵を出品する時に、今だったらコンテナ車が来て絵を積み込むんですけれども、当時は自分で板を作って絵に補強をして荷造りをして、それを日本通運から送り返してもらっていました。枠を作ると木切れがいっぱい出てくるわけですよね。父から「これでお前、なんか作ってみて」と言われてトンカチと釘を渡されて。それでいくつも鍋敷きを作って、母親にこれ僕が作ったばいって。もう鍋敷きがこんなにたまってしまって。ものを作ることに父の姿を通して何か興味を持ったというのが、いま思い返せば、最初のきっかけですね。

――きっかけはものづくりだったんですね。

阿部　母親が言っていたのは、気が付いたら私が畳の上に釘を打っていたと。大工さんが釘を打つ動作に憧れてね。「家中に何か釘を打って回りよったばい」と。何かそういうものを作るというよりも、最初は道具を使って何か大工さんの真似をしようみたいなね。

自然の作った形のおもしろさをどういうふうにやると、それが一つの作品になるかなとか、よく考えています。金属と流木を合わせたり、それに石を組み合わせたりしたらどうなるかなとか。頭の中で考える基本が、子供の時に芽生えてきていたという感じですね。

――父の平臣さんは家族と近い場所で制作しておられたんですね。

阿部　家の中の一番奥のアトリエでね。冬は石炭ストーブを焚いて、夏は全部開けっ放しで描いている姿を見ていました。ほとんど毎日描いていましたからね。
父親がいない時に、いたずらじゃないけれど、どんな絵の具が付くかなと思って、父が描いている絵に父の道具を使って塗ってみたんですね。そうしたら翌日、「直昭、お前お父さんの絵に描いたか？」と言われて。やっぱ分かるんだなって思いましてね。そういうエピソードはありました。

――絵を描こうと思われた経緯はどのようなものでしたか。

阿部　絵描きになろうって思ったのは、思春期になった時に美大に行きたいという気持ちが湧いてきてからですね。そのためには木炭デッサンなんかをやらなくちゃいけないということで、高校時代からデッサンを始めました。美大を卒業した後には、就職するか、あるいはもうちょっとこう自由を満喫したいかという選択にかられましてね。学生時代にバイトで貯めたお金と親からちょっと足してもらったお金で、飛び出してみようと思いまして、一年半ぐらいの海外生活を放浪の旅をしました。たった一人でどこまで通用するかっていう気持ちで、旅を続けたんですけれど、そこでの現地の人とのコミュニケーションとか、日本とは違う風景ですね。海外生活の中で見て、過ごしている時は何げなかったことも、日本に帰国した後に思い返すと、あの当時の住宅の窓枠だとか、ドアの色だとか、そういうものがずっと頭の中に残って、私が絵を描く時の原点の色として、いまでも形に残っているなと思っています。

アトリエにある海外の壁などを撮った写真。
作品の着想源となっている。

海外で見たものの記憶が絵を描く時の原点に

――一年半ほど海外で生活しておられたんですね。

阿部　最初はスペインのバルセロナに美術大学じゃないけれども、いい学校があるよというのを聞きました。ちょうど知り合いがいたので、日本にいる家族の方に相談したら、たぶん向こうでその人が世話してくれるだろうということで紹介してもらって、バルセロナに行ったんですけど、その人に会う前に盗難に遭いましてね。

――盗難というと。

阿部　バルセロナに着いて、大学の先輩がおられるところに訪ねて行きました。その先輩はバルセロナの郊外に住んでいらっしゃったんです。その翌日、その方が車で市内まで移動するから、「阿部さん、あんたも観光するんだから一緒に行く？」と誘われましてね。
その時、ちょうどその方のおうちでシャワーを浴びていました。普段は貴重品とかを外出する時には必ずお腹にサラシを巻いて、その中に入れていたんですけど、その呼びかけに早く応えなくちゃいけないということで、ショルダーバッグの中にパスポートや現金など、全部入れて慌てて車に飛び乗りました。バルセロナの市内に着いた時に、先輩と別れて、大きなランブラス通りをウインドーショッピングみたいに歩いていました。
外国人の女性が私の肩をぽんぽんと叩いて、何か汚れているよみたいなことを言う。女性がソフトクリームを背中にわざと付けて、あなたのジャンパーは汚れているよと呼びかけているんですね。そしたら仲間のアラブ人が二人寄ってきて、私の顔をあっちこっちに向ける。その時に洗ってあげるよとか、ティッシュを持って拭いてやるよとかいう親切心で、この人いい人やなと思わせた隙に、ショルダーバックの紐を下ろすのが向こうの目的でね。下ろした途端に片方が逃げて、そしてぱっと見たらカバンがない。本能的に逃げた男を追いかけたら実はもう一人の男がカバンを持って逆方向に逃げている。気が付いたら、バルセロナの街中の地理も分からないし、もう目の前が真っ白になりました。先輩のところに駆け込んで、警察に行って通訳で事情を伝えてもらったら、別の部屋から警官が私のカバンを持ってきてね。中身は全部取られていた。現金とトラベラーズチェック（小切手）もほとんど無くしたもんですから、別の日本人の方に相談しました。その方から、一つのところに滞在して生活するよりも、外国にいるなら可能な限りいろんなところを見て回った方が、自分の将来の為になるんやない？と言われて。その方がパリに住んでおられたので、そこを基地にさせてもらって北欧や中東、アフリカといったいろいろな方面に行くことにしました。結果的には、それが今の自分にとってとても為になった時間だなって思います。

――大学卒業後、おひとりで海外を巡られたということですが、その後、絵画教室の受講者の方々といっしょに何度か海外に行っておられますね。

阿部　卒業してすぐにひとり旅をした時に、言葉が話せなかったというのが本当に悔しい思い出として残っていました。自分が思っていることを相手に伝えることの難しさですね。ジェスチャーなどで相手の言っていることは何となく分かるんですけれど、こっちの思っていることが相手に伝わらないということが本当に悔しくて。独り旅ですので、チケットも買って電車に乗ったりするわけですけど、目的の場所に着いても本来ならもっと見られる場所があったんじゃないかと。駅の周りだけとか、一番の有名な観光地だけを見て、その国に行ったよというふうな生活を送っていましたから。
ある知り合いの旅行会社の方とお話をしている時に、「その悔しい思いを添乗員の私がカバーしますので、生徒さんと一緒に行きませんか」と言っていただけたんです。それでツアーを組んだら、ものの見事にね、こちらの思いが添乗員さんを通じて伝わって。やりたいことや見たいことが十分に満足するような旅になったものだから、10年間程生徒さんと一緒にヨーロッパ中心ですけど、いろいろなところに行かせてもらいました。
たとえばスペイン方面にこういう目的でツアーを組みますが、行きたい方はいらっしゃいますかと、その都度希望を募る。大都会を中心にいろんなところを見て回るような、そういうツアーではなくて、絵の題材になりそうな田舎の中の田舎を選んだ、特色のあるツアーを組んでもらったので、絵を描く人にとってはとても魅力的な旅になったんじゃないかなと思っています。

生徒の思いを一番に

――絵画教室での指導はどのようにされていますか。

阿部　父が作ったこの絵画教室ですが、父の時は、地塗りですね。たとえば花や果物を描く前に、キャンパス全体に自分の好きな色を置いたものを何枚か作っておくんです。父の絵画教室の時は、その地塗りにとても特色があって、絵を志す人にとって魅力的な描き方だったと思います。
けれども、私はその生徒さんが描きたいものを第一に考えています。たとえば花がどうしても描きたいんだという方がいらっしゃれば、地塗りを何枚か作っていただいて、その中でこの地塗りが、一番この花に合いそうですよと伝える。この花を置いたら、ちょうど作品として成立しますよとアドバイスしています。父の時は地塗りをとにかくなくさないように、ただ花だけを置きなさいというような指導だったんですが、進路を変更して生徒さんの欲求が満足するような形を心がけております。

――地塗りを大事にされているのですね。

阿部　そうですね。キャンパスを前にした時にまだ何を描くかはわからないけれども、周りの雰囲気だけを先につくってしまいましょうという世界ですね。それが一枚だけだったら描きたいものと合わない時があるので、4～5枚作ってもらます。模様とか色が違っていて、これが一番合いそうですよというものを選ぶ。マッチングというんですかね。そういうふうな形式で絵を作り上げてもらっているわけですね。

――絵画教室にはどういった方がいらっしゃるのでしょうか。

阿部　平均年齢が65～70歳ぐらいで、第一線をリタイアされた方が多いんです。教育系のお仕事をされていた方やご主人の仕事の手助けをされていた方、お医者さん。いろんな分野の方がいらっしゃいます。

――先ほど講評を拝見しましたが、皆さん、とても和やかな雰囲気に感じました。

阿部　こういうエピソードがあって。新しい方が一人入って来られて、だいぶ慣れてきた頃に、いろんな方に話しかけていらっしゃったんですね。その方が、「あなたはここで楽しく絵を描いていらっしゃいますが、どんな職業の方なんですか」ってお尋ねしたらですね、その質問された方がこういうふうに言われたそうです。その方はお医者さんだったんですけどね。「私も職業を持っておりますが、みんなの服装を見てください。この教室に来た時は、一年中おんなじ服装で、汚れてもいい格好で来られているんですよ。いろんな職業を皆さん持たれているけど、この教室の中では楽しく絵を描いていく雰囲気を皆さん大事にしておりますから」。
悪い意味で言ったんじゃなくてね。みんな和やかに絵を描くことを楽しんでおられるんですよということがお伝えしたくて、そういうことを言われたっていうね。教室の中で楽しく絵を描いていただくというのを第一に考えています。

自然の年月がつくる美しさに惹かれて

――阿部先生の制作について教えてください。

阿部　最初に「彩壁」シリーズに取りかかりました。中学の教員をしている時、三年生の京都と奈良の修学旅行に一緒に行っていました。京都や奈良の古い歴史の中に飛び込んでいくんですね。
学生の時には、古美術研究会、略して古美研と呼んでいましたが、それでも京都や奈良の寺院を訪ねていました。何百年という時の流れに沿って、寺院の壁や土塀が雨風にこたえてしみている様子とか、そういう年月が作る美しさに気が付きました。
普段はシミとかよごれは、汚いというイメージがあるかもしれませんが、専門家や絵描きがその色を作ろうと思っても、なかなか絵の具の調合だけではできない色があります。そういうものを見た時に、その色をどうにか出せないかなということで、このテーマに取り組みました。それを大学の卒業制作の中に生かしたんです。
卒業する時に仲のいい友達と銀座でグループ展をしたんですね。その時のグループ展の名称が「彩壁」です。その時に「彩壁」という名前を使ったものだから、題名に記念して「彩壁」をつけるということを続けてきました。

落選のショックの時に見た麦踏み

阿部　「大地」シリーズは、日本各地で美術のコンクールがあって、そこでは賞金が出る。賞金目当てもあって、いろいろなコンクールに出していました。ある時久留米の青木繁記念大賞公募展で賞を取るぞという意気込みで絵を描いていたんですが、予想に反して落選してしまったんですね。
絵を引き取りに行った時は、冬の２月の頃でしたが、久留米の周辺が麦踏みの季節でね。若い芽が出た時にトラクターみたいなもので、ずっと踏みつけて麦を倒していくわけです。
それを見た時に、ちょうど父親が小さい時に、「麦という穀物は芽が出た時に踏みつけないと大きく育たないんだ」と言っていたのを思い出しました。その日はその落選の引き取りの日だったから、いま自分は麦踏みで踏まれているなと。ショックが大きかったんですけどね。
そういうふうにその時は思っていたけれど、半年後に麦秋として育った麦を見ると、本当に風になびいて夕日に照らされて美しいなと思いましてね。それを絵に描いてみようと思って描いたのが、次の年に受賞した作品につながっていった。それが「麦」シリーズとして、あるいは「大地」シリーズとして続いています。

――絵画だけでなくオブジェづくりなど、いろいろな作品を手掛けておられますが、一番大事にしておられることはなんですか。

阿部　自然が作ったものには勝ることはできないので、日頃からアンテナを張り巡らせるようにしています。つい先日、母が亡くなって京都にお骨を納めに行ったんですけど、お墓が並んでいる間に土塀がありましてね。そこに自然が作った模様があってですね。それがいま頭の中にあって、今度の行動展の時に描きたいと思っています。まったく同じものはできませんけど。同じような構成で、頭の中にある映像をどのように構成して築き上げていくか。いま見ていることが自分の絵につながらないかなと。そういうところを大事にしています。

[聞き手]佐々木愛(学芸員)　[取材日]2024/3/14　　[発行]田川市美術館｜825-0016 福岡県田川市新町 11-56